

報告事項ク

平成23年度第2回鳥取県教育審議会学校等教育分科会の概要について

平成23年度第2回鳥取県教育審議会学校等教育分科会の概要について、別紙のとおり報告します。

平成23年12月22日

鳥取県教育委員会教育長 横 濱 純 一

平成23年度第2回鳥取県教育審議会学校等教育分科会の概要について

平成23年12月22日
高等学校課
小中学校課

1 日時 平成23年11月22日（火） 午前9時～正午

2 場所 鳥取県庁議会棟 3階 第12会議室

3 参加者 委員：9名

事務局：石田教育次長、藤原参事監兼高等学校課長、山本小中学校課長

牧野小中学校課義務教育主査、御船高等学校課高校教育企画室長

他教育委員会事務局関係者

4 議事

①今後の県立高等学校の在り方について

②今後の幼児教育の在り方について（鳥取県幼児教育振興プログラムの改訂）

5 委員からの主な意見

(1) 今後の県立高等学校の在り方について

- ・ 他県からも生徒が来たいと思わせるような魅力ある学校にしないと、生徒は増えないと思う。
- ・ 生徒が減るので学級減はしかたないと思うが、普職の学級の割合を変えずに減らすと専門学科の学級数が少なくなり、地域の産業界で働く人材がいなくなってしまう、地域の産業の衰退を招く恐れがある。安易に同じ割合で減らすのではなく、地域を支える人材を育成するという観点で、地域の実情に応じた学級の減らし方を検討する必要がある。
- ・ 様々な学科があるが、5年先、10年先を見据えて、本当に必要な学科について検討し、本県のビジョンを打ち出すことが必要。
- ・ 中学校段階では、高校の普通科指向が高いが、その半数は、明確な目標がない生徒であり、何となく普通科に決めている状況。地域に残り、地域の経済や産業を支えているのは普通科高校ではなく、専門高校を卒業した生徒であり、その人材育成を図ることで地域活性化が図られると思うが、保護者にも教員にもそのような考え方がない。また、将来、鳥取県をどうするかというビジョンが保護者にも生徒にもないので、何となく普通科高校に進学してしまう。中学校から、将来像が見えるようなキャリア教育を進めていく必要があると認識している。
- ・ 将来への明確な目標がない生徒は、高校の偏差値と自分の学力の点数を天秤にかけて高校を選ぶのが実態。保護者としては、子どもが具体的にある分野を目指したいと思うのであれば、その分野において特色のある高校に送り出してあげたい気持ちはある。
- ・ 東・中・西部という地域の大きな枠組みで学科の内容を検討していくことはできないか。また、全ての高校において、21世紀に生きる人間、社会に育つ人間として十分な教育を施しているか検証する必要がある。
- ・ 学校が、きちんと進路指導やキャリア教育を進めていく必要がある。
- ・ 中学生の希望と入れる高校のミスマッチなど、様々な段階でのミスマッチを是正する方策の検討が必要。また、すべての高校が特色を打ち出して、全国のミスマッチを起こしている高

校生に発信し、鳥取県に受け入れることも検討してはどうか。

- ・教職員が、自校の抱える課題等を認識するなど、現状の教育課題の分析をしなければ、新たな学校のビジョンづくりにもミスマッチが生じる。
- ・介護福祉士や看護師は人材不足であり、雇用サイドのニーズはあるので、例えば、介護福祉士は高校でヘルパー1級を取得させ、養成機関で介護福祉士資格を取得させることも可能では。また看護師は、専攻科を含めた5年一貫教育校を作って、大学進学へのステップにすればよいのでは。
- ・地域と連携した学校や学科の在り方、地域を支える人材を育成する高校の在り方を検討する必要がある。
- ・高校は人間性の確立・人格の完成に向けて養成していく機関であり、専門高校でも3分の2は一般教科が占めている状況である。したがって、早い時期に専門中心の教育に偏ってしまうことや専門性の高い学科が中心になり、一般教科が減っていくことはふさわしくないので、看護や介護という専門的な資格を取得できるような学科はふさわしくない。ただし、看護や介護の基礎を学ぶ広い意味での福祉マインドの育成は大事だと思う。
- ・スマートグリッドやメディア芸術分野について、専門的な内容は大学や大学院で養成すればよく、高校教育では、そのための基礎となる部分を学科の中に取り込んでいくことは大事かなと思う。
- ・キャリア教育をより充実させて、点数だけではない高校選びをさせたいという思いがあるし、中学校の総合的な学習の時間に、企業の体験活動や調査活動などのキャリア教育の充実を進めていけたらと思う。

(2) 今後の幼児教育の在り方について（鳥取県幼児教育振興プログラムの改訂）

- ・就学前教育の充実とは、先取り教育、早期教育ではなく、幼児期に必要な経験ができること、遊びの中で生きる力の基礎となる心情・意欲・態度をしっかりと育てることと確認しておきたい。
- ・就学前教育の中に、家庭教育を含めてほしい。発達障がいの子どもの育ちにも家庭教育が大きく影響しているので、プログラムに位置付けてほしい。
- ・幼児期から社会性をどう育てるかということについて研究する中で、社会性が育ったといえる指導は、①自己表現 ②共感 ③調整の3つである。資料にある学びの基礎づくりに①自己表現、豊かな人間性に②共感、健康な体づくりに③集団遊びを通じた調整という言葉を入れ、プログラムにも示してほしい。
- ・文字や数字の理解を保護者が大切にするのはわかるが、子ども自身がやりきった体験が大切である。「～しなさい」や「～してはいけません」ばかりではなく、自分でやったという喜びを大切にしたい。「夢中にさせる活動」を大事にしたい。
- ・人間は体験しないとわからない。幼児期は体験が多いほどよい。
- ・遊びを通して育てる心情・意欲・態度を、「遊びきる」という体験を通して育てる心情・意欲・態度としてはどうか。教員がめざす目標としてあげておきたい。
- ・幼児期に必要な経験の項目に、「学びの基礎づくり」、「豊かな人間性」、「健康な体づくり」などが列記されている。どれも大事なことであるが、「夢中になる」といった幼児期にふさわしい活動イメージがわく表現で書くのがよいのではないか。
- ・幼児期だから芽生えていいのだろうか。資料の言葉を見ると、小学生でも通用する。上手ではないけれどやりとおす、失敗するけれどやろうとするなど、子どもに直接かかわっている

者でないと表せない子どもの姿を書いてもらいたい。

- ・愛された体験、受け入れられた体験が基礎となる。協同する経験より、愛された経験が先である。その上で規範意識、道徳性、人とのかかわりがあると考え。また、好奇心は自然とのかかわりの中で育つものである。健康な体づくりについて、夜、居酒屋やコンビニにいる親子連れを見かける。資料の保護者の現状の中に、もっと危機感のある姿を入れてほしい。
- ・プログラム中に、幼児期に必要な経験が文章化されることで目標が共有され、教員が意識できるようになり、保育の充実につながる。
- ・安全な環境、危険を回避する力も必要である。
- ・自分で触れて、感じる場を作ることが大切である。具体的に書くのがよい。
- ・行政からも家庭教育が大事であると打ち出してほしい。世代のかかわりを引き出すようなもの、団塊の世代の活用も考え、子育て文化の伝承を大切にしたい。
- ・「丸太をみてワニと思えるような体験」を大事にする、そんなプログラムを期待する。

■鳥取県教育審議会学校等教育分科会委員名簿

氏名	所属・職名	備考
いけうち かつひこ 池内 勝彦	鳥取県高等学校PTA連合会会長	欠席
こえだ たつや 小枝 達也	鳥取大学地域学部教授、附属小学校校長	
しげまさ よしひろ 重政 好弘	鳥取大学学長顧問	
ふくしまちずこ 福嶋千寿子	倉吉市立久米中学校校長	
まつもと きよはる 松本 清治	県立倉吉総合産業高等学校校長	
まつもと のりこ 松本 典子	鳥取短期大学教務部長兼幼児教育保育学科教授	欠席
もりもと ひろこ 盛本 裕子	県立白兔養護学校校長	
やべ としあき 矢部 敏昭	鳥取大学副学長	
やまぐち あさこ 山口 朝子	鳥取市教育委員	欠席
やまもと かずよ 山本 和代	鳥取県PTA協議会副会長	
よしだ ひでみつ 吉田 秀光	三朝町長	
いちはし ゆきよ 市橋 幸代	湯梨浜町立松崎幼稚園園長	(臨)
もじま てるみ 茂嶋 照美	倉吉市立社小学校教頭	(臨) 欠席

※所属・職名欄の(臨)は、臨時委員。